

池野 旬 著

アフリカ農村と貧困削減 —タンザニア 開発と遭遇する地域—



京都大学学術出版会
2010年 410ページ
4000円+税

「アフリカ農村研究の残された課題」——本書はこのタイトルの序章で始まる。著者は学部生時代の1976年、見聞を広げるためにアフリカ、ケニアに初渡航し、卒業後に就職したアジア経済研究所で研究者人生をスタートさせた。その著者が、約35年間携わってきたアフリカ農村研究の世界に対して今思う、残された重要な課題を提起する。その課題とは、「ミクロ・マクロ・ギャップの架橋」である。アフリカ農村を対象にした社会科学的研究において、国家や(亜)大陸単位でのマクロ・データを使った研究と、研究者自らが収集したミクロ・データに基づく研究との間には、消極的評価 vs 積極的評価というような齟齬や乖離が存在することが一部研究者により指摘されてきた。いまだ埋められていないこのギャップを架橋することこそが、今後のアフリカ農村を考えていくうえで重要であると著者は指摘する。

本書はその試みのひとつであり、ミクロとマクロの中間に位置する「地域」を柔軟に措定し、それら「地域」の主体性を析出することによって、両者の架橋を目指している。具体的には、まず第2章で、事例国タンザニアにおける国家レベルの開発政策の変遷が詳しく検討される。続く第3章では、国家と市民の間に位置する「県」という「地域」に注目する。事例としてキリマンジャロ州ムワンガ県におけるコーヒー経済と食糧不足の問題が国家政策との関連のなかで考察され、県を中心とした地域の主体性の萌芽が指摘される。本章の特徴のひとつは、県レベルの、主には現地言語による種々の資料が精査されている点にあるが、アフリカの地方行政にどのような情報・資料が存在しているかということや、それらデータを扱ううえでの留意点、精細に解説される読解方法は、他のアフリカ諸国を対象とする研究者にとっても大いに参考になるのではないだろうか。

第4章では「地域」の視点をさらにミクロなレベルに移し、前章までに見たような社会経済環境の変化に応じて農家が復活させた、同県キリスィ集落周辺の乾季灌漑作が取り上げられる。そして日常的には個別世帯が比較的自立している社会において、自主的に取り組

まれる柔軟で開放的な灌漑管理の詳細が考察される。その後乾季灌漑作は低迷していくが、逆相関を示すように活性化していくムワンガ町経済の動きが人口動態を基に第5章で解説される。同町の発展によって周辺農村部にも興隆している非農業活動の展望については、農村インフォーマル・セクター論からの検討が加えられる。さらに都市化の進展過程で課題となった水道整備を自分たちの手で成し遂げようとする、同町のヴドイ村区という「地域」の力強い主体性が描かれていく。

この一連の研究を読むことで、マクロ・データ分析で導かれる「食糧不足」という結果は真実か、下位区分の「地域」ごとの動向から何が見えてくるか、ミクロ分析の成果や発見は全体のなかでどのように位置づけられるのか、といったことへの答えの一部が見えてくるだろう。著者が協業を要請している開発諸学者や地域研究者にはとくに読むべき価値があると思われる。しかし本書はミクロとマクロの架橋を目指す事例研究のひとつであり、その試みは始まったばかりである。これに続く研究、とりわけ地方分権化が進むアフリカ諸国の研究において、ミクロとマクロを繋げる新たなストーリーが多く見出されていくことが期待されている。

もうひとつ。本書の各章の終りには、著者が調査の傍らいつしか夢中で追いかけるようになった鳥たちの写真が添えられている。趣味の域を超えつつあるこれらの貴重な写真と解説はきっと、読者にひと時の休息を与え、現地の風景に思いを馳せるのに一役買ってくれるだろう。

(一條洋子/京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科/日本学術振興会特別研究員)